

日本作業療法士協会 海外研修助成制度

実績報告書

学会名：WFOT Congress 2026

演題名：Facilitating school reintegration in a 10-year-old boy with social withdrawal: Supporting child's hobbies and coaching parents

会期：2026年2月9日～12日

開催地：バンコク、タイ

申請者

氏名：池部 淳

所属：なし

会員番号：50057

所属士会：千葉県

1. 発表演題の概要

序論：本邦のひきこもり当事者は約 146 万人と推計され、重大な社会的課題となっている 1)。ひきこもり支援では、段階的かつ個別化された介入が推奨される 2)が、OT の介入報告は少ない。本報告では、ひきこもり状態にある初等教育後半の男児に、OT が段階的支援を行った結果、復学に至った事例を報告し、ひきこもりからの回復に寄与した要因を明らかにする。目的：ひきこもり状態の男児と母親への OT 経過を分析し、復学に至った要因を明らかにする。方法：男児と母親に地域で OT を約 2 年半実施した。介入前後に、ひきこもりの程度をひきこもりのステージ分類 3) で測定した。また母親と OT で Canadian occupational performance measure (以下、COPM) にて目標「元気に学校に行くことができる (重要度 10 点)」を設定し、目標達成度を Goal Attainment Scale (以下、GAS) を用いて可視化した。倫理的配慮：事例は未成年のため、代諾者である母親から書面同意を得た。事例紹介：事例は、10 歳の男児で家族と同居している。担任の叱責を契機に小学校を不登校となった (X 年)。初期評価 (X+1 年) 時、男児は学校への不満や不安を訴えていた。ひきこもりのステージは中等度 (1、2 週に 1 回の外出) であった。介入：①母親への介入：チャットアプリ (平均月 2 回)、および、対面 (2 か月に 1 回、90 分)、で母親へのコーチングを行った。母の困りごとを傾聴し、男児のストレングスに気がつけるよう助言した。また母と OT が話し合い、男児の将来へのステップを GAS で可視化した。「社会参加：外出不可 (-2 点) から登校可能 (+2 点)」「調理：ジンジャエールを作ることができる (-2 点) からスパイスカレーを作り家族にふるまう (+2 点)」。

②男児への介入：男児がスパイスに興味を持っていたため、男児と OT でスパイスカレーを作り (1、2 か月に 1 回、3 時間) 家族にふるまった。結果：母および男児への支援を 2 年半継続した結果、X+3 年に男児は私立中学校に進学し、登校

可能となった。ひきこもりステージは介入前の中等度から介入後は非該当（ひきこもりから回復）となった。COPMは遂行度が1点から9点へ、満足度は1点から7点へ、GASは、社会参加が-1点から+2点へ、調理は-2点から+2点へ向上した。母親から「友達に随分と支えられています。心理的に随分と楽になりました」との話が聞かれた。考察：ひきこもり状態の子供の家庭外活動への参加や復学を促進する要因として、①保護者への相談支援、②当事者の興味に基づく活動機会の提供を並行して支援することの有用性が示唆された。①は、母親の感情的安定を促し、男児の家庭内での安心感を向上させた可能性がある。②は、自己選択の機会や肯定的な作業経験を得る機会となり、地域での趣味活動への継続参加や復学の基盤となったと考えられる。今後は、事例を蓄積し、今回得られた仮説の有用性や適用範囲について検証していくことが求められる。

2. 学会参加と発表の印象

WFOT Congress2026は、私にとって2度目のWFOT大会への参加でした。初回は2014年の横浜大会です。作業療法士免許を取得して間もなかった当時の私は、各国のOTからなされる多様な報告に圧倒され、その幅広さに驚きました。正直なところ、共通項がわかりませんでした。しかし、同時に、「作業療法という同じ旗のもとに集まっている以上、必ず中心部分には共通するものがあるはずだ」とも思いました。「その共通部分とは何なのだろうか」、という問いが、私が横浜大会で得た最大の学びであり、その後の、「作業療法とは何か」という探究の出発点になったと感じています。バンコク大会の初日のオープニングセレモニーでは、各国の代表が次々と旗を掲げて登壇し、会場に向けて笑顔で手を振る姿が印象的でした。それぞれ、自国の文化的な衣装をまとっている方も多く見受けられました。会場の参加者は、壇上に自国の代表が現れると、大きな歓声を上げていました。その光景は、まるでオリンピックの入場行進のようでした。その場を体験していると、強い喜びと安心感が湧き上がってくるのを感じました。世界各国に作業療法士の仲間が存在し、それぞれが、自身や自国の社会的・文化的文脈の中で、作業療法的な目的のもと、時には困難に向かい合いながら、実践を積み重ねているという事実を実感できたことが、その感情につながったのだと思います。作業療法士という専門職のコミュニティーへの連帯感を強く感じました。印象に残っている発表の一つに、日本における、30年の作業療法研究の動向を整理した報告がありました。各国の多様な発表を経験する中で、この報告は私に時間軸という視点を与えてくれました。参加者一人ひとりには、それぞれの人生があります。そして、それぞれが持つ時間軸の中で、この瞬間、同じ場所に集っている。そのことの偶然性と貴重さを感じられたことも、私にとっては感慨深い体験でした。幸いなことに、自身の発表テーマについて、何ヶ国かのOTと、ディスカッションをする機会に恵まれました。共通して感じたのは、真摯に私の話に耳を傾けてくださる姿勢でした。穏やかかつ真剣な表情、タイミングの良い相槌、私の言葉を引き出すための、支持的な言葉かけがありました。英語が得意でないため、言葉を紡ぐのには時間がかかるのですが、

いずれの方も、丁寧に私のペースに合わせて話を聞いて下さいました。私自身を認めてくれている、私の報告を尊敬してくれている、そんな安心感を感じる中でディスカッションを行うことができました。理屈として理解していた、心理的安全性を実感として体験できたことは大きな学びでした。また、日本人作業療法士との対話も印象深いものでした。国外という環境下での共有体験が影響したためか、普段以上に率直で深い対話が行えているような所感を得ました。ここで知り合った日本人 OT の皆様とは、これからも良い関係を築いていけそうな印象もあり、今後の協働の可能性を感じる出会いとなりました。さらに、発表内容そのものに加えて、「なぜそのテーマに取り組みられたのか」、「そのテーマに興味を持った理由は何なのか」などについて尋ねると、発表者の個人的な動機や価値観に触れることができました。それは単に報告内容の共有にとどまらず、ある意味では、それぞれの参加者が個人的な価値を置く、人生の物語の一端を共有する営みであるとも感じました。多様性（横軸）と時間軸（縦軸）の双方に触れた時、「私の仕事は何だろうか？」という問いが改めて浮かんできました。本大会に参加することで、仕事を意味的な側面から再考する機会を得たと言ってもいいかもしれません。あなたの仕事は何ですか、という問いに対して、現時点での私は、「自分のクライアントがより良い作業的存在で在れるよう、支え、共に考え、工夫すること」と答えたいと思います。本大会への参加を通して、改めて感じたのは、臨床家が国際学会に参加する意義です。私は大学などの研究機関に所属しているわけではありません。しかし、臨床家という立場であっても、文献を参照しながら自身の実践を整理し言語化することで、それを国際的な場で共有することは可能であり、意義があると実感しました。また各国からの報告を現地で聴講し、直接ディスカッションを行う中で、自身の実践と対比することは、俯瞰的に自分の実践を捉えるきっかけとなりました。この経験は、自身の臨床の質を高めることに直結する重要な学びであったと考えています。具体的な、今後の取り組みとしては、地域で立ち上げた、学校に行きづらさを感じているお子さんを持つ保護者のための対話の会を、必要な方に届けられるよう、進めていきたいと考えています。また、今回、自分が演題として登録した内容については、学術誌作業療法の実践報告として投稿できるよう準備を進めていきたいと思いません。最後に、このような貴重な学びの機会をご支援くださいました日本作業療法士協会に心より感謝申し上げます。本大会で得た学びとつながりを、今後の臨床、地域活動、学術活動を通して社会に還元していきたいと考えています。

3. 文献

1) こども家庭庁：こども・若者の意識と生活に関する調査（令和4年度）第3部 調査結果の概要Ⅱ.

https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/85674a4c-22e0-4483-a7fb-83319b266439/4406b2d0/20250305-resources-research-children-attitudes_06.pdf（参照 2026-2-15）.

2)厚生労働省：ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン.

<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12000000-Shakaiengokyoku-Shakai/0000147789.pdf> (参照 2026-2-015).

3)Kato TA, Kanba S, Teo AR: Defining pathological social withdrawal: proposed diagnostic criteria for hikikomori. World Psychiatry 19(1): 116-117, 2020, doi: 10.1002/wps.20705.

4. 論文掲載情報 (学術雑誌に投稿し、論文掲載された場合に記載)